

# 隨泉寺寺報

平成 23 年 (2011 年) 10 月号 第 494 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

秋季永代経法要

講師 円光寺住職 安部敏孝師

講題 『本願力に会い れば』

■永代経法要 ～永代に教えを伝える～

「永代経」とは、永代読経の略称です。真宗における起源ははっきりしないのですが、第 14 代寂如上人 (AD 1662～1725) の時代に執行されていることは、はっきりしています。亡くなられた方の追弔のために、永代にお経が読経されるよう願って、縁者が御懇志を納めたことに由来する仏事です (お寺では法名軸に故人のお名前を記入し、毎年法要をつとめてきました)。

これら篤信の方々による御懇志によって、ご本山やお寺が立派に護持され、お念仏のみ教えが永代に受け継がれる結ともつながっております。浄土真宗では、法要は供養のためではなく、あくまで故人をしのびながら、これを機縁 (きえん・きっかけのこと) として、經典を読誦し、仏さまの徳をたたえ感謝する生活をさせていただくためのものです。したがって、仏さまの教えを聞くことが最も大切であるとされていますので、浄土真宗のお寺は正しい仏法を聞く道場ともいえるでしょう。浄土真宗の年中行事のひとつである永代経は、他宗のような死者への供養ではなく、故人を追慕することを縁としてお寺に参詣するものです。

## 10月の法座予定

- 10月 9日 …… 掃除 高部
- 10月 14日 昼席午後 1 時より …… 秋季永代経法要
- 10月 14日 夜席午後 7 時より …… 出張法座 高部 岡埜 妙子氏宅
- 10月 15日 朝席午前 10 時より …… 若い婦人の集い おとき
- 10月 15日 昼席午後 1 時より …… 秋季永代経法要
- 11月 2日 午後 1 時より …… 作品づくり
- 11月 2日 午後 6 時より …… 門信徒会本部役員会

## ☆ 庫裏増改築事業が決まりました。

永年の懸案事項であった庫裏の増改築が決まりました。これから御門徒の皆さんにご無理を言いますが、よろしく願いいたします。隨泉寺の庫裏は昭和 51 年に建築されています。爾來隨泉寺の中心的な建物として、会議やおときなどの場所として、フル活動してくれました。しかし 35 年の時の流れはいかんともしがたくあちこちに支障が出てきました。特に水回りは水漏れが激しく修理も大掛かりになるという事で本格的に修理、改築をしようという事で計画がなされました。

また同時に時代の変化で椅子の生活がほとんどという状況の中で、庫裏での食事であれば椅子席が望ましいという要望も多く、広間を広げるという事になりました。

そこで倉庫を解体して厨房と倉庫を増築しようという事になりました。また、葬儀の様子も時代の変化で変わってまいりました。お家で葬儀を執行される方は稀でほとんどが葬儀場で執行されることになりました。お寺で葬儀をしてほしいという願いもよくありますが、お夜ができないという事で宿泊施設を造るという事で、客殿が新築されることになりました。



これからは自宅で葬儀をされるのが一番ですが、知らない葬儀場で最後の時を迎えられるよりは、隨泉寺の本堂で最後の式を執行されるというのが望ましいと思います。どうぞ期待してお待ちください。

## ☆隨泉寺の嗣法 (後継住職) を迎えます。



隨泉寺の住職の長女鎌田弥名が結婚することになりました。御門徒の皆さんから随分御心配をいただきましたが、ようやく決まり喜んでいきます。相手は大阪吹田市の教實寺の次男藤哲哉さんです。亡くなった前住職もずいぶん気にかけていました。

藤君のお父さんも私と一緒に御本山に奉職されていまして、よく存じ上げています。実家の兄も藤さんのお父さんをよく知っていたので、京都に行ったときに娘を藤さんの息子さんに紹介した事があるそうです。

それ以来、藤君は本願寺で財務部に奉職しておられて、長女弥名は親鸞聖人 750 回大遠忌法要の準備事務室と言うところで勤務していましたので、仕事上色々一緒にすることもあったのでしょうか。出会いということは不思議なことで、一緒に仕事をする中で、縁を深めたようです。藤君が次男と言う事で隨泉寺に入寺してもらった事となりました。結婚式は今年の 12 月 3 日 (土) 午前 11 時から隨泉寺の本堂で挙式することになりました。

どうぞ皆さん仏前結婚式を見学に来て下さい。御門徒の皆さんへの披露宴は 12 月 25 日の日曜日にする事になりました。ご多用のことと思いますが、ぜひともご出席していただき、激励して下さい。

10月

## 数えきれないほどのお米の一粒一粒が

いまこの茶碗の中に 私のために 東井 義雄師

数えきれないほどのお米の一粒々々が

一粒々々のかけがえのないいのちをひっさげて

いま この茶碗の中に

わたしのために

怠けているわたしの胃袋に目を覚まさせるために山淑が

山淑のいのちをひっさげて

わたしのために

梅干しもその横に

わたしのために……

白菜の漬物が

白菜のいのちをひっさげ

万点の味をもって

わたしのために……。

もったいなすぎる

もったいなすぎる

せめて わたしも

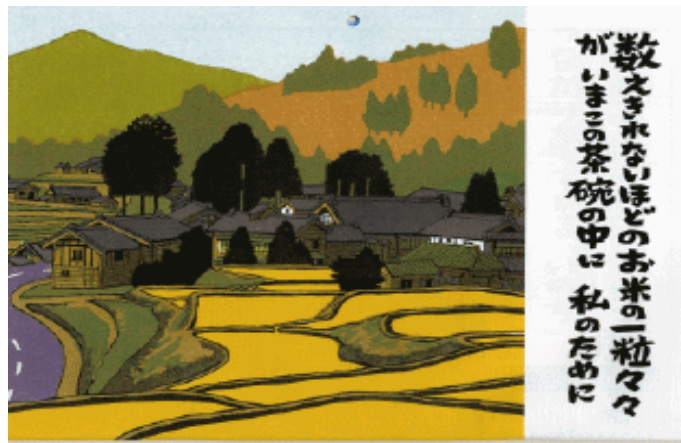
白菜の漬物のひときれにでもなって

ひとの心に

よろこびの灯をともしたい

思いあがるなど

叱られてしまいそうな気がするが……。



## ウチのとうちゃん何処

(温泉津)・西楽寺住職 菅原 昭生 (すがわら しょうせい)

むかしむかし、ある所に一人のおばあさんがいました。おばあさんは、まだ子どもが幼かった時に、連れ合いに先立たれました。しかし、そのことがご縁となってお寺にお参りするようになり、お念仏の教えに出遇（あ）われました。

「そうか。とうちゃんとはこの世限りのご縁じゃなかった。やがてまたお浄土で必ず会わせていただける。そして今も、ナンマンダブ、ナンマンダブのお念仏とともに私のところへかえってきてくれる……。」と、お念仏の日暮しを送って一生を終えました。お浄土に生まれたおばあさんはすぐに、なつかしいご主人を捜します。しかし、ご主人の姿はどこにも見当たりません。

「あれ、ウチのとうちゃんは、どこにいるのだろう……。また会えると聞かせてもろうていたのに……。」ちょうどその時、阿弥陀さまが近くをりかかられました。おばあさんは、矢も楯（たて）もたまらず駆け寄ってたずねます。

「あのお、ウチのとうちゃんは、どこにいるのでしょうか？」

その問いかけに阿弥陀さまは、にっこりとほほ笑んでおっしゃいました。

「ばあさんや、あれはね、ワタシだったんだよ」と。こんなお話を近所の先輩住職さんがして下さいました。さて、これはいったい、どういうことでしょうか？

「ウチのとうちゃんが阿弥陀さまだった」ということは、「阿弥陀さまがウチのとうちゃんという姿となってはたらいてくださっていた」ということになりますね。

その昔、平安時代の女流歌人・和泉式部は愛（まな）娘に先立たれています。彼女は、その時の気持ちを古歌に託して「子は死にて たどり行くらん死出の旅 道知れとて帰りこよかし」と嘆いたといひます。まさに亡き子を思い、心配する親心いっぴいの歌です。ところが、その和泉式部が仏さまの教えに出遇って、歌が変わります。「夢の世に あだにはかなき身を知れと 教えて帰る子は知識なり」と。知識とは、仏教語で「真実の仏道に導いて下さる方」という意味です。

つまり、先立ったわが子が自分のいのちをかけて、「母さん、これでもわからないの？ いつ終わるかわからないのが、命なのです。必ず迎えなければならぬ死があるのです。だからこそ、大切に生きて下さい……。」と教えて 仏の国へ帰っていった…と詠（よ）んだのです。よその子が死んでも他人事にしか思わない私のために、今あの子は「私の子として生まれ育ち、先立って真実を教え知らせようとしてくれた仏さまだった」といだけられたのです。「ウチのとうちゃん」も、おばあさんのご主人として連れ添い、苦楽を共にした日々を経て先立ち、おばあさんを念仏の教えに遇わせて浄土へと導いて下さった、おばあさんにとっての仏さまだったのです。「よそのとうちゃん」なら、こうはいきません。

今、このことを浄土に往生した後ではなく、生かされているこの時に聞かされたことに意味があるのだと私は思います。阿弥陀さまは南無阿弥陀仏のおよび声となって、そして時にはさまざま人や菩薩となって、苦悩の衆生を救って下さいます。それは私にとって、やさしい姿であることもあれば、厳しい姿であったりします。あるいは「憎まれ役」になってこの私を真実に導き育てて下さることもあるでしょう。『親鸞』の小説で名高い作家の吉川英治氏は、「我れ以外、皆、我が師なり」と言われたそうですが、お念仏申す人生では「我れ以外、みな我が菩薩なり」といだけることができるよう。亡き人をご縁に仏法に遇うとき、また会える世界があることを知らされます。いや、「すでに出会っていた」のでした。そして今、南無阿弥陀仏の念仏の中に私と一緒に歩いて下さっているのです。

やがて、人生の幕が降り、浄土へ往生させていただいたとき、あの言葉を聞かせていただくのでしょうか。「あれはね、ワタシだったのですよ」と。